

AURELIE PETREL

REPETITION

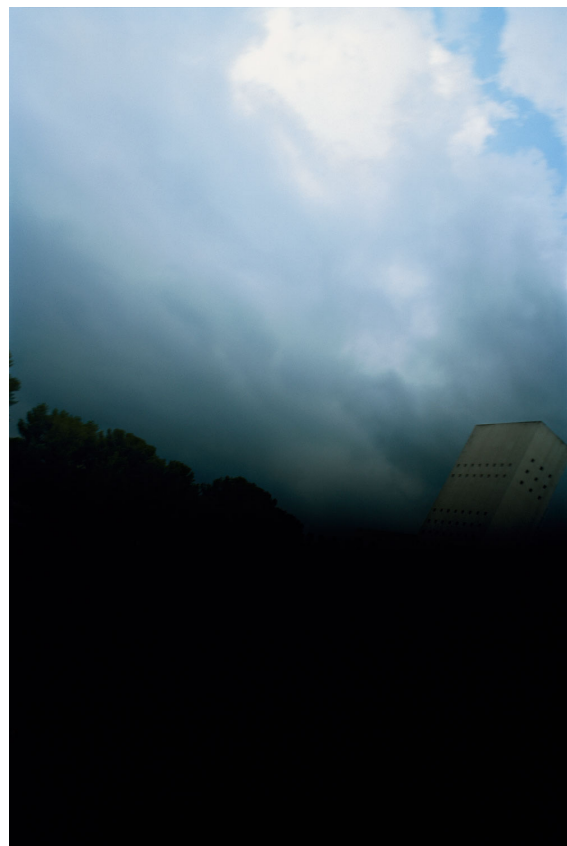
Openings : 09.04.25

Exhibitions : 09.04.26-09.06.06

Super Window Project™ & Gallery ではフランス人アーティスト、オレリー・ペトレル (1980年生) の日本初となる個展をMuzz Program Spaceとの共同企画でお届けします。オレリー・ペトレルは一連の新作写真を、建築様式もロケーションも全く異なった京都市内の2つの会場で同時に発表します。会場のひとつは、山手の住宅街に位置し、樂吉左衛門が所有する1975年に建てられた個人住宅 (Super Window Project™ & Gallery)、そしてもうひとつは、市街地にある元ホームセンターだった建物 (Muzz Program Space)。フランスの哲学者、ジル・ドゥルーズとクレモン・ロセにインスパイアされ、オレリー・ペトレルは写真によるインスタレーションを制作してきました。そこでは、鑑賞者をイメージそのものの中に入り込むよう誘うことで、現実、空間と知覚を巡る実験が試みられています。

ペトレルはイメージの内部で構造やレイヤーを展開するに当たって、ウィンドウステッカーに写真をプリントするという広告業界の手法を用いています。イメージの構成は写真が構想され、展示される空間の建築と結合し、実に斬新で独創的なイメージ体験を造り出します。イメージが建築の一部となり、建築が視覚的、精神的、社会学的、隠喩的、形而上学的な投影構造となるのです。静止し、無言で、遠く、ありそうでないが実は不在の現実が投影されるのです。ペトレルの写真によるインスタレーションが即物的に描き出すのは、こうした現実の不在にほかなりません。このようにして、ペトレルはテクニックという概念そのものを作り直し、テクニックは二面性を備えた営みの機会となるのです。それは、錯覚や視覚表現のコンセプトを増幅させるものです。作品と現実世界の間に関係が築かれるのです。世間一般のイメージの多くはことばを、ストーリーを語りかけてきます。その騒々しさを拒むことはできません。こうしたイメージはその対象の意味を消し去りますが、ペトレルが生み出すイメージは無言の証拠が立ち現れることに干渉したり、それを隠蔽するものを悉く排除しています。彼女の写真は主観のインパクトをフィルターにかけ、対象が備えた魔力が発揮されることを促します。対象は架空の境界線以上のものではありません。世界はすぐそこにありながら、つかみ所のない対象なのです。世界までの距離はどれくらいあるのでしょうか? どうすれば、もっとうまく焦点を合わせることができるのでしょうか? 写真は世界の架空の境界線をほんの束の間、映し出す鏡なののでしょうか?あるいは人間が、自らの意識の肥大した鏡像に惑わされ、視覚的な遠近感をねじ曲げ、世界の精緻さを不鮮明なものにしているのでしょうか? アメリカ製の車のバックミラーのように、遠近感をゆがめながらも「ミラーに映っているモノは思ったより近くにあるかも知れません」と親切に忠告してくれるようなものなのでしょうか? しかし実際は、ミラーに映っている対象は見かけよりも遠くにあるのではないのでしょうか? 写真のイメージは、「現実世界」と呼ばれてはいるが、実際には遙か遠くに存在するものに我々を近づけてくれるのでしょうか。それとも、対象の間近な存在やそのバーチャルな危険性から我々を守ってくれる人工的で綿密な知覚を造り出すことで、世界を遠ざけているのでしょうか?

REPETITIONにおいてオレリー・ペトレルがさらに探究を進めるのは、写真の奇跡であり、写真のいわゆる客観的イメージの奇跡ですが、それは根本的に非客観的な世界をさらけ出すものなのです。彼女はレプリカを超えた、だまし絵の領域へと私たちを導き入れます。ペトレルの写真は視覚的なテクニックの遊び、切り取られた現実の断面、静止状態、沈黙、そして運動の現象学的還元を通して、イメージの最も人工的で純粹きわまりない提示を高らかに主張しているのです。



Montperin, 2008, C-print and diasec, 100 x 66 cm (5ex + 2AF). Courtesy Super Window Project™ & Gallery, Kyoto.



To build a fire, 2008, C-print and diasec, 50 x 76 cm (5ex + 2AF). Courtesy Super Window Project™ & Gallery, Kyoto.